ふくりゅう

発行所　NPO日本下水文化研究会運営委員会
発行責任者　酒井　彰（運営委員会代表）
発行年月日　平成11年12月20日
印刷所　(株)愛甲社
編集　小松建司
秋号（通巻17号）

ＮＰＯとして承認される

兼ねてからの懸案であった当会の特定非営利活動法人化の件について、無事認証されたので、携わった照井委員より報告します。

特定非営利活動法人の認証と法人登記

日本下水文化研究会（以下、研究会）では、本年5月22日に開催された特定非営利活動法人設立総会で、法人設立の承認を得て、法人化への移行を進めていたが、10月7日に東京法務局新宿出張所への法人登記を済ませ、晴れて特定非営利活動法人日本下水文化研究会が設立されることとなった。

研究会では、設立総会後の6月3日に東京都生活文化局に特定非営利活動法人設立認証の申請を行っていたが、9月30日付けで認証の決定を受け、更に研究会の事務所の所在地を管轄する東京法務局新宿出張所に法人登記の申請を行い、このほど法人登記が受理されたものである。

これにより、研究会の正式名称は特定非営利活動法人日本下水文化研究会になるとともに、特定非営利活動促進法に基づく法人として社会的な認知を得たことになる。また、研究会の活動は、これまでの活動実績を踏まえながら、更に新たな活動を展開し、社会的に寄与していくことが求められることとなる。

一方、毎年度、事業報告書や財産目録、貸借対照表、収支計算書等の所轄庁(東京都)への提出、法人住民税の課税、情報公開の義務等が発生し、これまで以上にしっかりとした管理運営を行うことが求められている。

なお、特定非営利活動法人の設立認証を得る過程で、定款の一部を修正すべき指摘を受けて修正したが、いずれも些細な部分であったことを報告する。

（文責　照井委員）

「水シンポジウム　in　東京」報告

水の週間の行事として、8月5日（木）～6日（金）にかけて第4回「水シンポジウム in　東京」が都庁舎をメイン会場にして行われました。土木学会水理委員会、建設省関東地建、東京都から構成される実行委員会が主催したものですが、これは各地建ブロック持ちまわりで毎年この時期に開かれているものです。

今年は本会評議員でもあります高橋裕東京大学名誉教授の基調講演の後、以下の4つの分科会に分かれてシンポジウムが行われました。

第1分科会：「市民による環境化学」
第2分科会：「清らかで豊かな水を求めて－上下流の取組み」
第3分科会：「都市における水循環の創出（都市は“水“とどうつきあっていくべきか）」
第4分科会：「都市の水辺に戻ってきた生き物たち」
特別企画：「一緒に創ろう、明日の水辺」

この内、第3分科会にパネリストとして「日本下水文化研究会」へ参加要請がありましたので、「下水文化の継承」と題して発題させていただきました。その他のパネリストの方々はそれぞれの地域において水環境の再生や雨水利用への取組みなど、地道な活動の成果を報告されておりました。

分科会の後で、各座長による総合討論がなされましたが、小学生から大人までかなり幅広い取組みがなされていると高い評価が与えられていました。しかし、全国的に見ると、このような取組みを行っているのは首都圏に偏っているきらいがあり、層のひろがりを期待する意見が多くありました。

当日は、当会のバルトン忌とかち合ってしまいましたが、当研究会にこのような場への参加が要請されたことは、当会の活動もようやく知られるようになったという意味で大変うれしく思います。

（文責　谷口尚弘）

’99バルトン忌開催する

恒例になったバルトン忌は、8月5日に没後100年という事で、特別企画としてシンポジウムを青山AAビル「コンフォート」で行いました。

暑い中、バルトンのお墓の前に多くの参加が集合し、セレモニーを行った後コンフォートに場所を移し、シンポジウムを開催しました。青山俊樹氏（建設省技監）・岡澤和好氏（厚生省水道環境部水道整備課長）・栗原秀人氏（建設省都市局下水道部下水道事業調整官）・鈴木　章氏（東京都下水道局長）・鳥海幸子さん等の来賓の挨拶の後、

基調講演を増子敦氏(東京都水道局建設部設計一課長)が演題『バルトンと東京水道』で行った。特別報告"Scotland とバルトン"を稲永　丈夫氏(日本スコットランド協会理事)、照井仁氏(日本下水道協会)が"バルトンが日本に遺した業績を集めて"を報告した。その後、パネルディスカッション「バルトンの偉業とその今日的意義」と題し、パネラーとして市川新氏(京都大学)、稲場紀久雄氏(大阪経済大学)、坂本弘道氏(水資源開発公団)、玉井義弘氏(日水コン)、早瀬隆司氏(長崎大学)、コーディネーターを酒井彰 (流通科学大学)で熱の入ったディスカッションを交わしました。

'99バルトン忌に参加して

下関市水道局経営計画課
主事　西村和枝

8月5日(木)東京で開催された「'99バルトン忌」に参加しました。

バルトン先生は明治24年に来関し、水道布設のための調査をなさった「下関水道の父」です。今年はバルトン先生の没後100年という意義深い年でもあり、我が水道局の情報誌「WATER　TALK」でも6月に発行した第11号でバルトン特集をしました。

バルトン忌当日は、じっとしているだけでも全身から汗が流れ出す程の真夏日でしたが、厳しい暑さにもかかわらず、全国から80名を越える人々が墓参のために集まりました。

先生の曾孫鳥海幸子さんも京都から駆けつけ、「曽祖父が亡くなった100年前の今日も、やはりこのように暑い日だったのでしょう。こんなにたくさんの方々にお集まりいただいて、曽祖父も喜んでいることと思います」と話していらっしゃいました。先生の故郷スコットランドの民謡AMAING　GRACE を全員で合唱して墓前に捧げ、一人一人献花をしました。

その後、場所を移して開かれたパネルディスカッションでは、「バルトンの偉業とその今日的意義」と題し、21世紀の水行政のあり方について活発に議論が交わされました。

「今日の水道はバルトン先生とその後継者によって築かれ、生命に対する尊厳を守るために、妥協を許さず徹底してコレラなどの悪疫と戦ってきた。しかし、環境ホルモンやエストロゲン(女性ホルモン)などの新たな問題を突きつけられている今こそ、私達は原点に戻って先生を現代的に再評価し、21世紀に立ち向かわなければならない」等、興味深いお話をうかがうことができました。

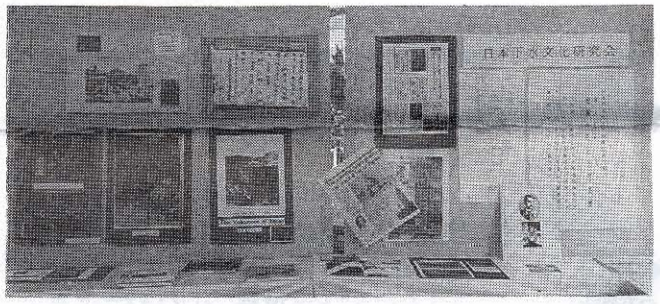
パネルディスカッションのなかでは、思いがけず「WATER　TALK」が紹介されるという事件(?)がありました。嬉しいことに多くの方々が関心を示してくださり、送付希望のお申し出を受けました。

下関市の水道はもうすぐ100歳を迎えます。給水開始当時とは水道を取り巻く環境は大きく変わってきていますが、「水道は人間の生命を守るもの」というバルトン先生の思想を忘れることなく、21世紀も安全でおいしい水の供給に努めていかなければ、と気持ちを引き締めた一日でした。

大にぎわい
大阪府下水道フェスティバル'99

9月4日夜来の雨も上がり、明るく広々とした安威川流域下水道中央処理場で「大阪府下水道フェスティバル'99」が行われました。珍しい水生生物を集めた水槽が展示されていたり、勉強になるゲームが用意されていたり、どのコーナーも各都市の下水道事業に携わる方々の熱意と工夫が感じられます。

日本下水文化研究会関西支部の「W.K.バルトン没後百年記念写真展」にも多くの方が立ち寄られ、写真や資料を見ながら質問をしたりメモをとったりする姿が見られました。



▲バルトン先生写真展

リサイクル製品コーナーの展示品は、毎年無料でみなさんに差し上げて大好評ですが、今年は品名を書いた三角くじを引いてもらうようにしましたので、ちょっとワクワク！滋賀県環境生協から購入したおなじみの粉石鹸やトイレット・ペーパー、石鹸はみがき、廃食油利用のディーゼル用オイルなどとともに、一抱えもある大きな袋入りの園芸用有機肥料も並べられ、重いのでどうなることか心配でしたが、三角くじがあたった人は「家庭菜園に」「ガーデニングに」と大よろこびで持って帰られ、ホッとしました。

▲リサイクルコーナー（有機肥料の大袋にご注目）

▼がんばって、スイカ割りゲーム！

こどもたちのためには、いつものように紙芝居やおりがみも用意していましたが、人気は「スイカわりゲーム」に集中しました。プラスティック製のスイカですが、なかなかよくできていて色も形もほんものそっくり。ビニールの棒で上手にたたくとポンとわれるしかけになっていて、中からスイカ太郎が…いえいえ、中から「たれぱんだ」や「ピカチュウ」や「あんぱんまん」などの人気キャラクター・ティッシュが出てきます。小さい子も大きい子もお父さん、お母さんも一緒に「キティちゃんの入れて」「だんご3兄弟のティッシュや」などと大受けでした。小さなコーナーですが、今年もいきいきとした体験をさせていただくことができました。

（蓼倉虫b）

'99水環境セミナー開催される

9月5日京都市の京大会館で、全国上下水道コンサルタント関西支部、水道事業活性化懇談会、日本下水文化研究会の主催による'99水環境セミナー（W・K・バルトン没後100年記念）が、日曜日にもかかわらず、(古澤大阪府土木部長をはじめ）97名の出席者をえて開催されました。

主催者を代表して仮井尚雄全国上下水道コンサルタント協会関西支部長の挨拶のあと、午前中は住友恒京都大学大学院教授と稲場紀久雄大阪経済大学教授の講演が行われました。

住友教授は「水道の将来と民間企業の役割」と題し、水道事業を取り巻く問題を幅広く講演され、特に水道事業の民営化の問題は避けて通れないそのため、自己資本の強化、経営の独立性等をはかる必要性があると述べられ、また、コンサルタントに対して情報のシンクタンクとして脱皮するように述べられました。

稲場教授は「成熟民主社会の水環境と下水道」と題し、環境ホルモンの問題を考えると、現在の下水道システムが破綻をさらに加速するのではないか、と主張されました。特に低用量ピルの解禁を取り上げ、ピルに起因ある物質の処理が出来ない下水道処理システムによる水環境汚染の問題点にふれ、下水道システムの根本的な見直しと現行法の改正の必要性を強調されました。

午後は先ず、武島繁雄全国上下水道コンサルタント協会会長が「私の夢　新しい道を拓く」と題し、半世紀に及ぶ、武島氏の下水道事業の経験談とエピソードなどを述べられました。水環境を考えると、未だに多くの問題が残されており、その例として水利権を取り上げ、これらの問題を解決するために水基本法の制定を望みたいと述べられました。

続いて、「21世紀の上下水道　私はこう考える」と題して、稲場教授をコーディネーターとし、パネリストとしてコンサルタント協会から片山憲一（新東洋技術コンサルタント）、村岡治（極東技工コンサルタント）、水道事業活性化懇談会から岩崎政夫（エスティム）、宮田和郎（メイケン）、文化研究会から石田雄弘（下水道総合研究所）、酒井彰（流通科学大学）によるパネル・ディスカッションが行われました。

先ず始めに各パネリストから戦後の上下水道の5大ニュースについて述べられ、続いて各パネリストの「21世紀への上下水道のあり方と方向について」語られたあと参加者との意見交換が行われました。

パネリストからは、21世紀の上下水道について次のような意見が述べられました。

・水道事業の範囲を給水設備まで拡大し、環境ホルモン等を考えると将来は各戸に飲料水のための浄化装置等を設置することも考えられる。

・水道事業を民営化するためには、水道事業を更に広域化する必要がある。

・水行政の一本化が必要である。そのためには水基本法の制定が是非とも必要である。

・下水道においては、合流式下水道の改善、集中豪雨によるゲリラ降雨の対策がメインになる。

・下水道は今までは有機汚濁防止の範疇から出ていないが、今後は環境リスクを広義にとらえた、下水道システムが必要である。

・環境の視点を無視した、利便性のみを追求する生活様式を改める必要がある。

これらの意見に対して、出席者からは、「水道水を将来とも飲料水として利用すべきか、「水環境の保全のためには、河川等の水を利用しているという実績が必要であり、利用しなくなった河川は急速に悪化する」等の意見があり、パネリストと活発な意見交換が行われました。転換期に

さしかかっている上下水道界が21世紀の始まりという節目を迎える現在、制度的にもそして水そのものをどう把とらえていくのかということに関しても多くの議論が残されていることを痛感しました。NPOとしての日本下水文化研究会がどう活動していけばいいかについても考えさせられた一日でした。　（記　木村・酒井）

第一回定例研究会
都市開発における代謝系施設の特性比較と下水道
～松下　潤・住都公団都市整備部次長が講演～

今年度の第一回定例研究会が、9月25日（土）に千駄ヶ谷の「けんぽプラザ」で開かれた。講師は、本会の会員である住宅都市整備公団神奈川地域支社・整備部次長の松下潤氏で、氏が東京大学の博士号を取得したのを記念して、その学位論文「（研究報告）都市開発における代謝系施設の特性比較と下水道」の内容について講演した。

都市開発の領域では、道路整備が開発目的そのものとされているのに対して、水・廃棄物・エネルギー分野の事業はこれまで、「供給処理施設」として、副次的な役割を担ってきた。

松下氏は『これまで言わば"月見草"的な存在であった、これら供給処理施設は、地球環境問題やリサイクルといった時代の要請により、表舞台に登場することになった』と語り、従来の都市計画のフレームに代えて、環境面の制約に加えた循環型の新しい都市代謝構造へ転換していく方向を喚起した。これは、40年間にわたる住都公団の都市開発を分析し、公民の役割分担をもとにした循環システムとして、水系では中水道、水循環システム、廃棄物系では厨芥類緑地還元システム、エネルギー系では地域冷暖房システムを新しい施設計画の枠組みとして提案し、今後の都市再構築において一定の普遍性を持ちうることになろうと結論づけている。

講演は、膨大な資料とOHPを使って、予定時間を30分以上超過する熱のこもったものだった。

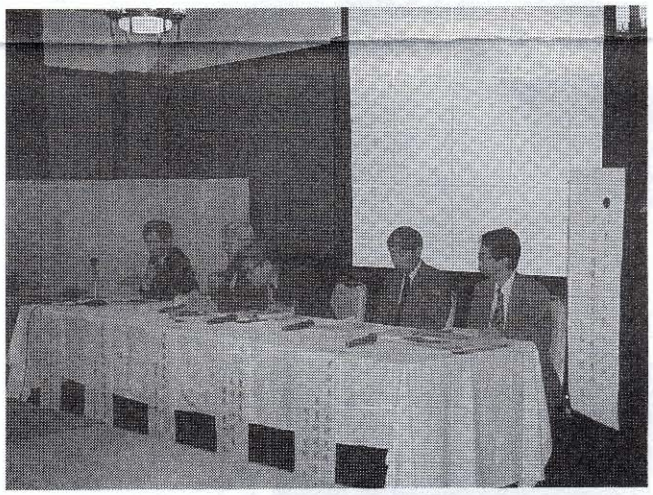
記　中村隆一

第5回下水文化研究発表会報告
「中身の濃い論文は貴重」の声も！
…第5回「下水文化研究発表会」参加者から…

平成11年11月12日、神田学士会館において第5回「下水文化研究発表会」が開催されました。当日は第2回「下水文化研究発表会」の下水文化活動部門で優秀論文賞を受賞された国立市長が来賓挨拶をしてくださいました。市長は挨拶の中で「発表の場が少ない市民のために発表の場を設けられている下水文化研究会の果たしている役割は大きい」と述べられました。

午前中は滋賀県琵琶湖研究所所長の中村正久氏の基調講演「ワールドウォーターヴィジョンと琵琶湖」、本会代表酒井彰氏の問題提起「水に関わる環境リスクとそのマネジメント」が行われ、昼休みには避妊薬ピル服用がもたらす環境への影響についてのビデオ上映も行われました。

午後は下水文化史部門9編（内1編は紙上発表）・下水文化活動部門8編・下水文化研究部門8編の研究発表会が行われました。ある参加者は「この研究発表会は中身が濃いですね。どの論文もすばらしい研究成果ばかりに思えます」と言っておりました。



部門別発表会に引き続き「環境ホルモンーその生活と水との関わり」をテーマにパネルディスカッションが行われ、パネラーから貴重な発言や提言がされました。

今回の優秀論文には下水文化史部門の「明石城下町の排水施設」渡辺昇氏・下水文化活動部門の「住民参加による河川環境整備計画の策定に関する事例研究」高橋秀和氏・下水文化研究部門の「出産と下水文化」賀久はつ氏が選ばれ、西堀評議員代表を代行して谷口運営委員から各氏に賞状と記念品が渡されました。

閉会後には参加者有志による交流親睦会がなごやかに行われました。

ある参加者の感想にもあるとおり、この研究発表会は毎回中身が濃く充実したものなのですが、今回はやはり不況の影響を受けたものなのか、参加者がいままでりも若干少なくなっていたのが残念に思いました。

（栗田記）

付記　基調講演・問題提起・パネルディスカッションの内容については平成12年度発行予定の「下水文化研究」第12号に掲載いたします。

第5回「下水文化を見る会」報告

「下水文化を見る会」は、毎回好評を得ていますが、今年は、船で隅田川を下りながら、隅田川に注ぐ川や下水などの施設を見ようという企画でした。

当日は、穏やかな天気に恵まれました、両国にある桟橋から船は隅田川を遡ります。千住大橋までは、噺家春風亭柳之助師匠の両国の花火を主題とした小咄を聴きました。師匠は、九州の出身だそうですが、江戸弁が板に付いていました。

下りは、栗田さんと柳之助師匠との掛け合いで、今はもうない川の蹟や、現存する川、下水などの施設を説明受けながら、臨海地区の有明に着くまで船旅を楽しみました。

隅田川には結構色々な川や施設がありましたが、残念ながら潮位が高いため、目で見ることができなかった処がたくさんありました。

有明でとりあえず解散しましたが、この後、東京都下水道局の竹島さんの案内で、有明処理場を1時間以上をかけて施設見学しましたが、大方の人が参加しました。最後に水道局の水の科学館を見て本解散となりました。

（記・小松）

第5回「下水文化を見る会」（母なる川・隅田川）に参加して

㈱株式会社 東洋コンサルタント関東支社
大 澤 佳 子

時は、平成11年11月13日（土） 晴天 午前10時30分 東京水辺ライン両国発着場集合 ではまりました。

両国から千住大橋までは、春風亭柳之助さんの落語を聞きながらの隅田川・川上りでした。私は、食いしん坊なので駒形橋ではどぜう・むぎとろ、吾妻橋に近づくと天ぷらそばと佃煮が頭をかすめ、言問橋付近はお団子・桜餅と等を想いながら景色を眺めていました。

千住大橋で船はUタウンして、有明に向かって川下りです。春風亭柳之助さんから栗田彰さんにバトンタッチして隅田川の見学会に入りました。

秀吉時代に家康は江戸に軍事目的で配置されたとのこと。そのころの隅田川には橋が架かってなく、1594年東北への遠征のために千住大橋が架けられ、これが隅田川での最初の橋だったことや、水上交通が盛んだった事を証言する隅田川（船専用）駅があったり、いまでも見え隠れする川・堀や吐口等の説明を聞きながら東京湾へ向かいました。

隅田川は包容力があり、いろいろな川や堀を受け入れ、母のようなやさしさで、江戸から今日の東京までを支えていることを改めてわかりました。

築地市場が見え、浜離宮を越すと東京湾です。昔、小さいときの東京湾は広く感じましたが、埋立によりお台場が陸と繋がり、湾と云うより隅田川の延長のような感覚で有明発着場について、処理場見学。

場長自らのご案内で見学させていただきました。普段行けない処理場内は広く、これだけの施設がないと汚水が処理されない事を思うと、分別ゴミや電力量のPRのように、下水に流せる物と駄目な物のPRをし、下水処理問題の大切さを各家庭に行き届かせないと、自然環境は守れないと強く感じました。

私が、下水文化研究会に参加したのは、図面を描いて「東京の下水は、誰が計画したのだろう？」とのおもいでした。そのとき新聞にバルトン忌が記載されていて参加させていただきました。今回も楽しく、お勉強になる見学会をありがとうございました。

付記 **春風亭柳之助師匠** が国立演芸場で2000年1月19日（水）18時30分から**独演会**を開きます。木戸銭は2000円だそうです。ぜひ聴きたいという方は、Tel & fax03(5399)0529にてお問い合わせ下さい。

分科会 し尿研究会報告

9月3日（金）新しい日本下水文化研究会事務所で東京都下水道局鈴木清志さんから「世界のトイレその3」をお話して頂きました。参加者は10名。

ヨーロッパ、アジア、南米のトイレの話は興味が尽きませんでした。慣習、宗教、衛生観、支配者の慣習、気候等でその形態が異なり興味深かったと思います。アフリカの「ふんころがし」の話も面白く聞けました。

新しい方の参加もあり、話は9時過ぎまで続きました。分科会は皆様の参加をお待ちしておりますので、希望の方は、事務所までお申し込み下さい。開催日等の通知をいたします。

記事

水道産業新聞　1999.9.27「水音」より

みんなの見える場所に"ただ今の電力消費量が示されていて、電気を消すと数字が変わる▼「これからはそうなる」と未石冨太郎京大教授(当時)が言った。「我々はポカーンと聞いていた」と松下潤住都公団次長。三十年前の話だという▼その後、その趣旨を実現する方策を考え続けているのだそうだ。例えばニュータウンにコンポスト施設を造って皆で管理する。それによって処理場規模をセーブする▼「循環システムを組入れた都市の代謝構造モデルの構築」である。排出から処理処分に至る下水の流れの中に「共同コンポスト装置」なる循環システムを組込む▼「循環とは"いらなくする"ということ。極言すると、タンクを造れば下水管がいらなくなる。それを公ではなく民で考えていく」▼費用負担も民で考え、理屈が通れば公にも負担させる。「循環システムの導入とは、そういうことです」ということだった(「下水文化研究会」より)。

全国簡易水道協議会機関誌「水道」９月号より

わが国の近代上下水道の計画・建設を指導した英国人,Ｗ・Ｋ・バルトンの遺徳を偲ぶバルトン忌「バルトン没後百年記念シンポジウム」がバルトンの命日である8月5日,東京都内で行われた。毎年バルトン忌を行っている日本下水文化研究会(代表＝酒井彰・流通科学大学教授)の主催。シンポジウムに先立ち,東京・青山墓地に眠るバルトンの墓参を行った。シンポジウムには約80人が出席,バルトンの偉業と今日的意義を考えるパネルディスカッションなどが行われた。

墓参には約50人が参加,バルトンの墓前で酒井代表,稲場前代表が業績に感謝する挨拶を述べた。また京都から曽孫の鳥海幸子さんも駆けつけ挨拶。参加者一同でバルトンの出身地,スコットランドの歌を合唱したあと,一人ずつ献花して偉業を偲んだ。墓参にはテレビ局の取材もあった。

シンポジウムでは冒頭,渡辺和足・建設省河川局河川計画課長,岡沢和好・厚生省水道環境部水道整備課長(現水道環境部長),栗原秀人・建設省都市局下水道部下水道事業調整官,鈴木章・東京都下水道局長,鳥海幸子さん(曽孫)が挨拶,また,ブリテッシュ・カウンシル駐日代表(英国大使館文化参事官兼務)のマイケル・バレット氏の挨拶が代読され,「最近,英国の新聞に日本にハイ・ライフをもたらした人物ということで,バルトンが詳しく紹介され,見直されている。日本でこのように業績を讃える催しを行っていることに感謝している」と紹介された。

このあと,増子敦・東京都水道局建設部設計一課長が「バルトンと東京水道」と題して基調講演,東京に水道をつくることになったいきさつ,バルトンが東京水道の計画にどのように関与したか述べた。また,稲永丈夫・日本スコットランド協会理事が「スコットランドとバルトン」について,照井仁・日本下水文化研究会運営委員が「バルトンが日本に残した業績」について報告した。

パネルディスカッションは「バルトンの偉業とその今日的意義」と題し,市川新・京都大学教授,稲場紀久雄・大阪経済大学教授(前研究会代表),坂本弘道・水資源開発公団理事,玉井義弘・日水コン副社長,早瀬隆司・長崎大学教授が登壇,酒井代表の司会で行われた。

バルトンは明治期にわが国を近代化させるため,政府の招きで来日したお雇い外国人。東京大学で衛生工学の教べんをとるとともに，日本各地の主要都市の上下水道工事の計画調査ならびに設計指導をした。また,日本人女性と結婚,女児をもうけ,その子孫の1人が鳥海幸子さん。

NPO登録に向け移転

日本下水文化研究会

日本下水文化研究会事務局が新宿区富久町に移転した。同研究会はNPO登録申請中であり、今回の移転はそれに先だって行われたもの。

一六二―〇〇六七新宿区富久町六番五号（NJS富久ビル別館三階）
TEL／FAX〇三―五三六三―一一二九

▶12月6日水道産業新聞

正確な認識で対応を

下水文化研究発表会　環境ホルモンで議論

各分野の研究成果が

第五回下水文化研究発表会が十一月十二日、東京の学士会館で開催され、環境ホルモン問題など様々な研究が発表された。

まず、中村正久・滋賀県琵琶湖研究所所長が「ワールドウォーターヴィジョンと琵琶湖」と題して基調講演を行った後、酒井彰・流通科学大学教授が水に関わる環境リスクとそのマネジメント―について問題提起。続いて下水文化、下水文化活動、下水文化研究に分かれて発表がなされた。

最後には「環境ホルモン―その生活と水との関わり」をテーマにして、稲場紀久雄・大阪経済大学教授、国包章一・国立公衆衛生院水道工学部長、田中宏明・建設省土木研究所水質研究室長、中村所長をパネリストに迎えディスカッションが行われた。国包氏は、水道資器材からの溶出研究について説明。田中氏は処理場において環境ホルモンが減少している事例を報告した。稲場氏はこれらを受けて、環境ホルモン問題は通常の感覚で考えるべきではない―と強調した。

▲8月2日水道産業新聞

『都市開発と下水道』で

下水文化研究会開く

日本下水文化研究会は十五日、東京・千駄ヶ谷のけんぽプラザ集会室で平成十一年度第一回定例研究会を開き、松下潤氏（住宅・都市整備公団都市整備部次長）による「都市開発における代謝系施設の特性比較と下水道」の講演を聴いた。

▶8月11日下水道新聞

バルトン忌

近代上・下水道の恩人　没後100年でシンポジウム

▲9月30日水道産業新聞

本の紹介

1999/6/28水道産業新聞より

「環境ホルモンと経済社会」　著者　稲場紀久雄

稲場紀久雄大阪経済大学教授の企画・編集による「パネルディスカッション環境ホルモンと経済社会」がこのほど法律文化社から出版された。昨年十一月に大阪経大学会の主催で開催された同名のパネルディスカッションで展開された問題提起、討論などをとりまとめたもの。

同書は、第一部「問題提起」、第二部「討論」、第三部「まとめ」の三部構成となっており、第一部の「問題提起」では各パネリストの発言内容が紹介されている。稲場教授は環境ホルモン問題に対する欧米と日本の対応の違いを語り、森千里京都大学大学院医学研究科助教授は、環境ホルモンの人の健康や精子への影響を紹介。綿貫礼子津田塾大学講師は、イタリア・セベソにおけるダイオキシン飛散事故によるセベソ女性の生殖健康問題、母乳汚染問題などを報告。好廣眞一龍谷大学教授は、餌付けされた日本猿における奇形の多発を紹介するとともに、エサに含まれていた化学物質の関連性を示唆。また、末石冨太郎滋賀県立大学教授は我が国の社会経済システムやリスク管理の問題点、科学者の役割などを指摘している。

第二部の「討論」では、パネリスト間やパネリストとフロアーとの討議内容が収録されている。ライフスタイルや経済システムの転換問題、市民の役割、研究者の役割と市民の義務などを巡って熱のこもった議論が行われており、示唆に富んだ興味深い内容である。

第三部の「まとめ」では、先天性四肢障害児父母の会が製作した絵本『さっちゃんのまほうのて』の「おかあさん　さちこのては、どうして　みんなみたいにゆびがないの?」など胸が詰まるような子供と母親の会話や、別役実の詩「誰も知らなかった、気が付いたときには遅かった」を紹介し、問題の深刻さや手遅れになる前の対策の必要性を呼びかけている。

環境ホルモン問題は、因果関係がはっきりしないなどの理由で対策が後手後手になり勝ちだが、代償は世代を越えて受け継がれる。その克服のために何が必要か、何をなすべきかが同書の主題となっており、より多くの人が「何らかの行動を起こす」契機となることを期待したい。

B6判138頁、900円(税別)。希望者は全国の主要書店あるいは法律文化社(075-791-7131)まで。

全国簡易水道協議会機関誌「水道」９月号より

「江戸の川あるき」　　著者　栗田彰

現在,東京の町で水に接するといえば,皇居の堀,外堀,神田川,隅田川といったところだが,江戸の町だった頃は,堀,川が縦横に張り巡っていた。それは船運にまた防災用,排水路として活用され,江戸の町を支えていたのであるが,大正時代から昭和にかけてこれらの堀や川が下水道につくり替えられ,埋め立てられていった。その面影はほとんどない。

著者の栗田彰氏は江戸っ子で,東京都下水道局の生き字引的存在。現在,局嘱託員で,下水道局の古い資料の整理に当たっているが,本書は下水道の普及で昔の堀や川がどうなったか,現地を丹念に回って調べた探訪記である。

東京には堀のつく地名が随分ある。八丁堀や山谷堀などがよく知られているが,八丁堀といえば奉行所があって,時代劇に出てきておなじみ。今は堀はなく,地名に残るのみ。下水道の普及で必要なくなり,埋め立てられ道路などになったところが多い。

そんな江戸の町の堀や川の跡を訪ね,どこが堀や川だったのか,記録にも残っていないところを,石垣に残る排水口らしき穴を見つけ,その下が水路だったと突き止める。そして古文書を調べて歴史的ないわれなどを説明してくれる。普段,何気なく通り過ぎている街角に様々な歴史があるものだと興味を湧かせてくれる。江戸名所図会や現在の町のイラストマップも載せてあり,読みやすくしている。

下水道の普及が東京の町から水との触れ合いをなくしたといえるが,著者は下水道で水がきれいになり,町の中を流れるようにすればかつての江戸のように潤いのある町になると夢見ている。

目次

1. 外堀一周
2. 神田・日本橋
3. 八丁堀・京橋
4. 築地・佃島
5. 赤坂・芝
6. 青山・麻布
7. 四谷・早稲田・新宿
8. 音羽・大塚
9. 小石川・本郷
10. 下谷・鳥越
11. 根岸・浅草
12. 向島・本所
13. 深川
あとがき
参考文献

発行＝青蛙(せいあ)房　　1900円

Tel03(3813)-1599

草思社新刊ニュースより

「日本の川を甦らせた技師デ・レイケ」　著者　上林好之

明治初頭、荒廃した河川と港湾を再生するために政府はオランダから数名の水工技術者を招聘する。そのなかの一人、ヨハニス・デ・レイケは30年の長期にわたって日本に滞在し、淀川や木曽三川、九頭竜川、筑後川など、主要な河川の改修に実績を残した。

彼の帰国から約60年後、建設省の技術者として河川の改修に携わった著者は、デ・レイケの鋭敏な頭脳と、設計ににじみ出た人間性に心をひかれ、彼の一生を明らかにしようと決意する。

オランダに渡った著者が発見したのは、デ・レイケが親友のエッシャーに宛て日本から書き送った多数の手紙と、エッシャーの回想録だった。そこから浮かび上がったのは、日本人エリート官僚との確執に悩まされながら、愛妻の死を乗り越えて異国で懸命に仕事に励む、謹厳実直なデ・レイケの姿だった……。

草思社　　四六判上製・356頁本体2500円

〒151_0051.東京都渋谷区千駄ヶ谷2-33-8

TEL03-3470-6565FAX03・3470_2640

お近くの書店でお求めください。直送の場合、送料は380円です。

弁天様と水を訪ねて（二）

栗田　彰

小田原・蓮池弁財天

『弁才天信仰と俗信／笹間良彦・著』という本に小田原城内三の丸西方沼池に弁才天祠が祀られている、と書かれていましたので出かけてみました。

小田原駅から東海道線に沿って、“お城通り”を小田原城跡へ向かって行きますと左側の歩道上に「弁財天」と彫られた石柱が建っていました。オヤオヤ沼池は埋め立てられてしまったのかと思って石柱の裏側を見ますと、江戸時代に弁財天曲輪と呼ばれていた所の名称のようです。

城跡公園内にある市立図書館で聞いてみました。応対してくれた若い女子職員は首を傾げるばかりです。郷土史関係の本を見せてもらっておりますと、先程の女子職員よりは先輩らしい女子職員が来て「この蓮池弁財天のことではありませんか」と冊子を持ってきてくださいました。

「蓮池弁財天碑」が旭丘高等学校の裏側にあるように記されています。冊子の解説文によりますと『現在の旭丘高校、小田原検察庁附近一帯は小田原城三の丸の水濠の跡で、水濠の中に小島を設け弁財天を祀っていた。北条氏綱が江の島弁天を勧請したもので、蓮池弁財天と呼ばれ、この水濠一帯を弁天曲輪と称した』ということです。

その女子職員は他にも発掘調査報告書と小田原城についての本も出してくれました。小田原城についての本の中に正保元年（一六四四）に描かれた『相模国小田原城絵図』と、文久年間（一八六一～六四）に描かれたらしい『城絵図』が掲載されています。両方の絵図には濠の中の小島に弁財天社が描かれています。

「蓮池弁財天碑」の建っている所を教えていただいて、行ってみました。旭丘高校の脇から城跡公園へ入る所に「蓮池弁財天記」と書かれた説明板が建っていました。もしかすると、「蓮池弁財天碑」は石碑で、「蓮池弁財天記」はその石碑の説明板なのかも知れません。私は「蓮池弁財天碑」の石碑を見落としているかも知れません。説明板の少し先（旭丘高校の真裏、グランド外）に空濠があり、そこには橋が架かっています。橋を渡ったところに赤い鳥居が建っていまして、その先の小高いところに弁天様が祀られていました。弁天様は石像で琵琶を弾く姿をしています。弁天様が祀られている台に「平成十年三月吉日」とありました。

▲小田原城

◎お便り

レターヘッド：研究会英文名称等に応募された方からの記念品に対するお礼状を頂きましたので、掲載いたします。

貴研究会の英語名称の選択・決定に参加させていただいて嬉しかったです。　また、以前いただいた記念品を誠にありがとうございました。

今後も私が出来る限り、貴研究会の活動に参加させていただきたいと思います。　よろしくお願いいたします。

取締役 ダグラス・メイトランド Douglas Maitland
Associate Director XP SOFTWARE Pty. Ltd.

◎お知らせ

● 会費納入督促状送付のお知らせ

今年も間もなく会費の納入をお忘れした方に督促状を郵送いたします。10月25日現在での調査ですので、その後納入されました方は、破棄をしてください。

● e-mail アドレスをお持ちの方へ

e-mail アドレスをお持ちの方は、当会にお知らせ下さい。mail にてニュース等を配信を行いたいと思います。

ふくりゅうでは、**原稿を募集**しています。身近な話題などでも結構ですので送ってください。又、「ふくりゅう」に対する意見等もどしどし送ってください。

当会への　宛　先

〒 162-00676　東京都新宿区富久町6－5
NJS富久ビル別館　NPO日本下水文化研究会宛
問い合わせは　Fax にて　03(5363)1129
e-mail は当分の間　k-komatsu@pop12.odn.ne.jp

編集後記

下水文化研究11号の編集と、ふくりゅうの編集、その他会の行事、私事の行事と兎に角忙しく大変遅くなってしまいました。NPO 法人となった第一号です。（建）